

精神障害者の家族研究に関する動向と課題  
—レビュー論文の検討に基づいた研究の概観—

加藤 勇人, 鈴木 啓子

Trends and issues in research on families having members with  
mental illness : an overview of research based on literature review

Hayato KATO, Keiko SUZUKI

名桜大学

環太平洋地域文化研究 No. 2 抜刷

2021年 3 月

## 精神障害者の家族研究に関する動向と課題 —レビュー論文の検討に基づいた研究の概観—

加藤 勇人\*, 鈴木 啓子\*\*

### Trends and issues in research on families having members with mental illness : an overview of research based on literature review

Hayato KATO\*, Keiko SUZUKI\*\*

#### 要 旨

本研究の目的は、精神障害者の家族研究に関するレビュー論文の検討を通して、精神障害者の家族研究における動向と今後の研究課題を明らかにすることである。データベース（医中誌とCiNii）を用い、国内で発表された精神障害者の家族研究に関するレビュー論文を対象に文献検索を行った。その結果14件の文献が抽出され、その動向と内容について質的に検討した。精神障害者の家族研究に関するテーマとして「家族関係と患者の疾患の関係性に着目した研究」「ケアを通しての家族の体験に関する研究」「負担感や困難感を中心とした家族の思いに関する研究」「家族支援に関する研究」「家族の続柄に焦点をあてた研究」の5つの内容が抽出された。また今後の研究課題として「家族のストレングスを生かした支援の検討」「家族の経験や状況を踏まえた支援の検討」「日本の文化を踏まえた支援の検討」「社会資源を活用した支援の検討」の4つが明らかになった。以上より、家族を様々な側面からとらえて理解をすることと家族を必ずしもケアの担い手としてとらえない新たな支援の必要性が示唆された。

キーワード：精神障害、家族、文献検討、家族支援

#### Abstract

The purpose of this study is to clarify the trends and issues in research on families having members with mental illness through literature review of review papers on family research for mentally disabled persons. Using the two databases from ICHUSHI and CiNii, a search was done on the literature published in Japan for review papers on studies of families having members with mental illness. As a result, 14 papers were extracted, and their trends and contents were qualitatively examined. Five research themes on families with mental illness members were identified: “research focusing on the effect of the patient’s condition on family relationships”, “research on family experiences through care”, “research on family feelings focusing on burden and difficulty”, “research on family support”, and “research focusing on family relationships”. The study identified four issues for future research that focus on “support utilizing family strength”, “support based on family experience and situation”, “support based on Japanese culture”, and “support using social resources”. From the above findings, it was suggested that it is necessary to understand the family from various aspects and to provide new support that does not necessarily regard the families as caregivers.

\* 名桜大学看護学研究科修士課程 〒905-8585 沖縄県名護市字為又1220-1 Graduate School of Nursing, Meio University, 1220-1 Biimata, Nago, Okinawa 905-8585 Japan

\*\* 名桜大学人間健康学部看護学科 〒905-8585 沖縄県名護市字為又1220-1 Department of Sciences in Nursing, Faculty of Human Health Sciences, Meio University, 1220-1 Biimata, Nago, Okinawa 905-8585 Japan

**Keywords:** mental illness, family members, review of research, family intervention

## 1. はじめに

2017年の調査（厚生労働省，2020）によると我が国の精神疾患を有する患者は，419.3万人に上る。厚生労働省は，「入院医療中心から地域生活中心へ」を基本方針とした「精神保健医療福祉の改革ビジョン」を掲げ，精神障害者が地域で暮らせるように医療体制の整備を行ってきた（厚生労働省，2004）。2017年には精神障害者が，地域の一員として安心してその人らしい暮らしができるような「精神障害にも対応した地域包括ケアシステム」の構築を目指すことを新たな理念として掲げた（厚生労働省，2017）。

一方で，我が国では現在も精神障害者の多くが家族と同居している実態がある（厚生労働省，2011）。全国精神保健福祉連合会（2010）の調査によると79.5%の家族が患者と同居している。さらに最近まで家族は精神障害者の保護者として，法律上保護義務者としてその責任を負わねばならなかった（川崎，2012）。その一方で意に反し入院させられたと患者がとらえた場合には，家族は直接憎悪の対象にもなりえる（杉森，2017；Clearyら，2020）。患者が退院すると家族がその生活を支え見守ることが社会的にも自明なことと期待され（杉森，2017），制度上も患者が家族以外のケアを求めることが困難な状況が作り出されてきた。家族は患者への直接的なケア提供者としての苦悩を抱え（藤野ら，2009），偏見や差別を恐れ外部からの精神的支援を受けにくい孤立無援などの情緒的負担感を強め（岩崎，1998；佐藤，2006），自身の心身の健康状態が不良となり（田中ら，2009；松田ら，2013），家族内外から支援を受ける必要がある（半澤ら，2009）ことが指摘されている。以上のことから精神障害者の地域生活への移行と平行して，その生活を支える家族の支援が重要な課題となっている。

従来の精神保健福祉サービスは，主に患者に生じている症状や困難等の問題に焦点が当てられてきた。しかし，抱える問題に焦点を当てることは新たな問題を引き起こすとして，問題志向とは異なる当事者のもてるストレングスや，希望や目標を志向するリカバリー概念を基盤とする新たな支援方法が近年広がりを見せている（チャールズ・A・ラップら，2017）。リカバリーとは「病気や障害があってもなお，その人らしく充実した生き方を目指すプロセス」を重視する概念である（丸本ら，2016）。精神障害者の家族支援も，これまで家族の抱える介護負担や困難感に焦点を当てた報告が多くみられた（半澤，2008，2009；川口ら，2014）が，精神障害者への支援が問題志向型からリカバリー志向型へと変化する

中で家族支援についても新しい視点での検討が求められる。

精神障害者の家族については従来，医療者側からの視点で実践や研究が行われてきた（濱田ら，2007）。1940年代から1960年代の家族病因論による事例研究をかわきりに，統合失調症の家族の感情表出が患者の再発に影響を与えるといった実証的研究が行われ，その研究成果をもとに家族心理教育が普及してきた（半澤，2005；中坪，2008）。これらの長年の経過における精神障害者を対象とした家族研究は多数報告されているが，地域包括ケアシステムの構築が推進される今日（厚生労働省，2020），精神障害者も家族も地域でその人らしく生活できるための支援がどのようにあるとよいのか，これまでの精神障害者の家族研究を検討し，今後の研究課題を明確化する必要がある。

以上のことを踏まえると新たな視点で家族支援を行うために，これまでの精神障害者の家族研究を検討する必要がある。精神障害者の家族研究はこれまでに数多く実施されており，また，これらを批判的に検討し今後の問題解明に向け研究全般の進展状況を明らかにしたレビュー論文も複数報告されている。しかし，これらのレビュー論文の検討対象論文の発行期間や取り上げているテーマは様々であり，それらをすべて取り上げてさらに研究の動向や今後の研究課題を包括的に明らかにした研究報告はない。本稿では，国内で発表された精神障害者の家族研究に関するレビュー論文の検討を通して，精神障害者の家族研究の動向と今後の研究課題を明らかにすることを目的とした。

## 2. 用語の操作的定義

本稿では，先行研究（甘佐ら，2013；長江ら，2013；高橋ら，2014）をもとに精神障害者を「精神面の問題を抱え，統合失調症，気分障害，神経症ストレスに関連する何らかの診断名がついている者」とした。

## 3. 方法

### 1) 文献検索と対象文献の選定方法

医学中央雑誌Web版Ver.5（以下医中誌）及びCiNii Articles（以下CiNii）を用いて，全年でデータベース検索を行った（2020年4月5日検索）。検索キーワードは，「精神障害者」，「精神疾患」，「家族」，「文献」とした。さらに，選定した論文の対象文献及び引用・参考文献から精神障害者の家族研究に関するレビュー論文をハンド

サーチした。

最終的には合計14件について検討を行った。選定条件を含めた検索プロセスの詳細は図1のとおりである。

## 2) 文献の分析方法

抽出された文献にナンバリングを行い、山川ら (2014) のクリティーク方法を参照し、文献ナンバー、著者、出版年、出展、研究目的、データベース、キーワード、検索結果文献数、分析対象文献数、選定条件、研究テーマ、研究の展望及び今後の課題に整理し比較検討した。特に「研究テーマ」と「研究の展望および今後の課題」については、それぞれのレビュー論文の内容を抽出しコードとした。意味の類似したコードをまとめてサブカテゴリとし、さらにサブカテゴリで意味の類似したものについてカテゴリとしてまとめ、詳細に分析を行った。

## 4. 結果

### 1) 論文の概要

14文献の概要は表1のとおりである。文献の順序は、出版年を基準とした。

選定されたレビュー論文で使用されている文献の国内外の種別における検索期間と分析期間を整理した結果は図2の通りである。精神障害者の家族研究に関するレ

ビュー論文は2005年以降に発表されていた。レビュー論文の出版年は2000年代が3件 (No.1, 2, 3), 2010年代が11件 (No.4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 14) であった。

それぞれのレビュー論文で分析対象文献 (以下レビュー論文内で検討された文献のことを指す) は国外で1948年、国内で1977年のものからであった。50年以上の広範囲で文献検討していたものが3件 (No.2, 3, 4) 存在した。これらのレビュー論文は検索対象範囲及び分析対象範囲が国内外共にほぼ共通であった。また、国内の文献のみを対象に検討しているレビュー論文は7件 (No.1, 7, 9, 10, 11, 12, 14) であった。

### 2) 研究目的について

研究目的として以下の5つの内容が抽出された。(1) 統合失調症を含めた精神障害者の家族研究の動向と課題を明らかにした5件 (No.2, 3, 4, 10, 12), (2) 家族成員の続柄ごとの特徴を明らかにした4件 (No.7, 8, 9, 14), (3) 統合失調症以外の精神疾患に焦点を当て家族研究の動向と課題を明らかにした2件 (No.6, 13), (4) 精神障害者の症状の時期における家族の体験や看護を明らかにした2件 (No.1, 12), (5) その他が2件 (No.5, 11) であった。

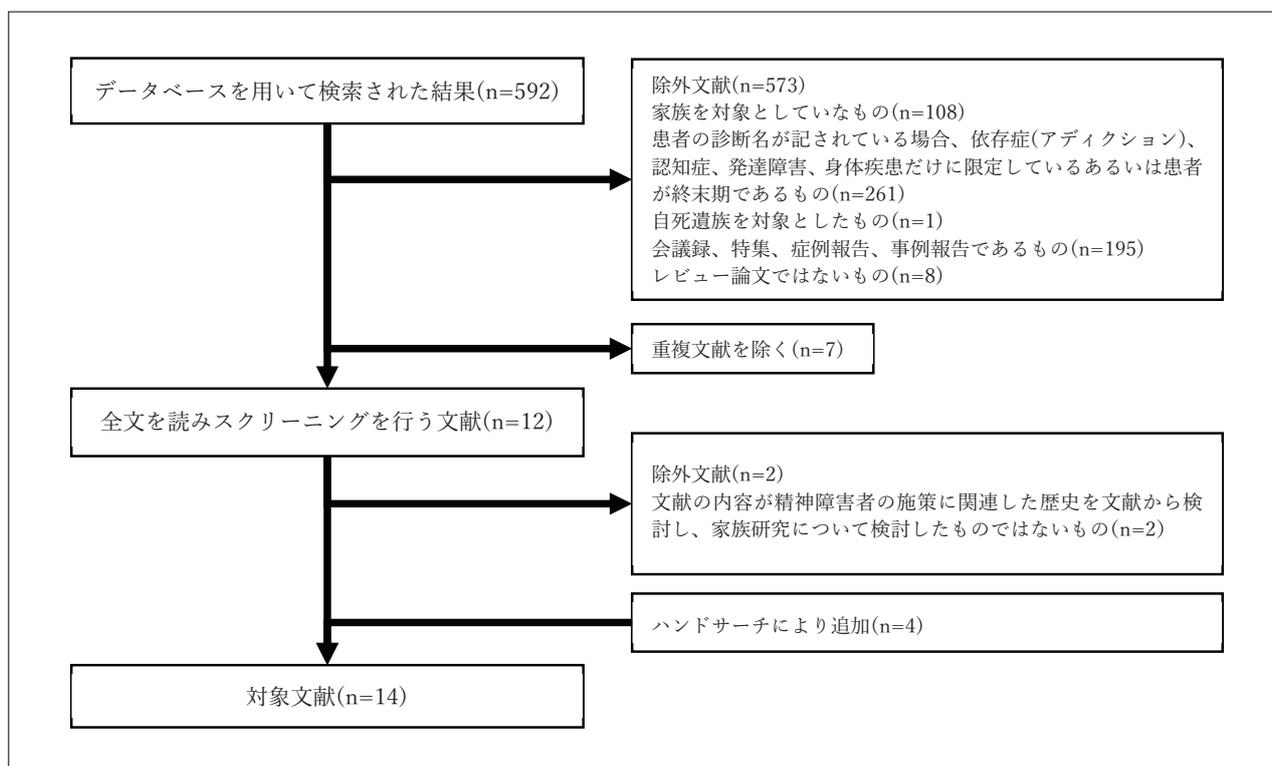


図1 選定プロセス

表 1 文献概要

No	著者名,出版年	出典	研究目的	データベース	キーワード	検索経路文献数 (国外+国内)	選定条件	結果	研究の展望および今後の課題
1*	甘佐ら,2005	人間看護 急性期の精神科看護の現状 学研究,2 や、精神科看護における動向 号,53-59 への関わりについて よび、精神科に限らず急性期 に限って必要とされる家族看 護やその実態について、国内 の研究論文を検討し今後の精 神科の急性期における家族看 護についての指針を得ること	医中誌 「精神科看護」 「家族」	138 (0+138)	記述なし (除外条件) ・キーワードは含まれているものの、 家族への介入支援が明らかに示されて いないもの ・疾患について明らかに関係領域内では ないもの	・入院及び発症後の家族のニーズについての研究 ・心理教育に関する研究 ・患者の社会復帰に向けた取り組みに関する研究	・ケアの必要性に応じた精神保健専門職による訪問 援助を拡充し、その頻度と内容に関連させた家族の 介護負担感の改善プロセスの検討 ・地域の文化背景による家族状況の比較検討	・患者の入院期間中の家族が精神的な不安を感じ、 教育や指導を受け入れる力を呼び起こす看護支援の 検討 ・退院に際している家族が早期の家族教育を受け入 れることができるような支援方法の検討 ・発症までの期間に合わせた支援方法の検討	
2	半澤,2005	人間文化 1960年代以降施設化、地域 研究,3 生活支援の流れにある欧米と 巻,65-89 は異なる家族支援の文化を持 つ日本において、重篤な慢性 再発疾患である統合失調症者 の家族研究の進むべき方向性 を際するため	記述なし	記述なし	44 (38+6)	記述なし	・家族病因論説に関する研究 ・家族の感情表出に関する研究 ・介護負担感の研究 ・介護経験評価に関する研究 ・心理教育に関する研究	・ケアの必要性に応じた精神保健専門職による訪問 援助を拡充し、その頻度と内容を関連させた家族の 介護負担感の改善プロセスの検討 ・地域の文化背景による家族状況の比較検討	
3	中坪,2008	東洋大学 統合失調症患者の家族を対象 大学院教 として、これまで取り組まれ 青年研究 てきた研究について概観する 科紀要,48 こと 巻,203- 211	記述なし	記述なし	51 (30+21)	記述なし	・家族病因論説に関する研究 ・家族の感情表出に関する研究 ・介護経験評価に関する研究 ・家族の心理プロセスに関する研究	・困難な状況の中にある家族の「エンパワメント体 験」や、家族を支えている要因といった「肯定的側 面」についての検討	
4	田野中,2011	立命館大 統合失調症の家族に関する諸 間科学研 外国および日本の先行研究の 究,23 内容を検討し、今後の統合失 巻,75-89 調症の家族研究の課題を明ら かにすること	「mentally ill」 「schizophrenia」 「family」	491 (145+346)*2	85 (26+59)*2	〈包含条件(国外)*1〉 ・タイトル、抄録から精神障害者家族 に関するもの 除外条件(国内)*4 ・研究論文の形式をとっていないもの ・研究目的に合致しないもの	・家族が実際に必要としている具体的な社会資源の 内容や在り方についての検討 ・日本の家族介護の現状を考慮した家族会プログラ ムの内容の検討 ・家族のエンパワメントや回復力、希望を支える要 素の検討 ・現象学を含めた多様な学問や研究方法を用いた家 族理解のさらなる検討 ・家族会員の母性列の困難を明らかにし、それぞれ のニーズに合わせた支援方法の検討		
5	藤山,2012	日本看護 家族が精神障害者をケアする 科学会 経験の過程について国内外の 誌,32巻,4 文献をレビューし、研究の動 号,63-70 向と過程における共通段階を 明らかにする	「mental ill」 「schizophrenia」 「depression」 「bipolar」 「family」 「caregiver」 「carer」 「adaptation」 「coping」 「process」 「phase」 「stage」	1345 (1060+285)	17 (14+3)	〈包含条件〉 ・患者の病気が統合失調症、うつ病、 躁うつ病であるもの ・家族が精神障害者をケアする経験を 段階的に過程として記述しているもの (除外条件) ・入院前後など本人の経験に基づく段 階のもの ・一般化が困難な特殊な状況下の経験 や一事例の報告のもの ・結果の解釈に必要な対象者やテー マ 収集などの方法、段階の説明が無記載 のもの	・家族が経験の過程を家族的に選ぶことができるよ うな支援方法の検討 ・家族が経験の過程を家族的に進めない要因とその 作用機序の検討 ・経験の終盤における、「現実的な希望」以外の経 験の検討 ・診断前の家族の経験、および専門家や支援システ ムに関する家族の経験を含めた経験内容の検討 ・日本の文化に関連した家族の経験の検討 ・統合失調症以外の患者を包含した家族のケア経験 の検討		

加藤・鈴木：精神障害者の家族研究に関する動向と課題

No	著者名,出版年	出典	研究目的	データベース	キーワード	検索結果文献数 (国外+国内)	分析対象文献数 (国外+国内)	選定条件	結果	研究の展望および今後の課題
6	酒井,2013	脚見学園 海外における双極性障害患者の介護 女子大学の介護者が抱える困難や負担 文学部 介護に関する研究、および専門家 床心理学 によるサポートへのニーズに 関する論文を掲載し、双極性 科107- 障害の介護者が抱える負担の 119 現状について考察を行い、今 後の研究課題を検討すること	海外における双極性障害患者の介護 女子大学の介護者が抱える困難や負担 文学部 介護に関する研究、および専門家 床心理学 によるサポートへのニーズに 関する論文を掲載し、双極性 科107- 障害の介護者が抱える負担の 119 現状について考察を行い、今 後の研究課題を検討すること	Pubmed [bipolar] [family] [burden]	「発達」 「統合失調症と精神症状を伴う障害」 「家族心理」	15 (15+0)	記述なし	記述なし ・双極性障害における介護負担感の程度に関する研 究 ・介護負担感と関連する要因及び介護負担感を引き 起こされるプロセスに関する研究 ・介護負担感が引き起こす結果に関する研究 ・介護者の対処および必要とされているサポートに 関する研究	・双極性障害患者を介護する家族の負担感を適切に 評価できる尺度の検討 ・双極性障害患者の家族の感情による負担感の違い についての検討	
7	平ら,2013	大阪大学 過去10年間に刊行された発行 医中誌 看護学雑誌 研究における記述を分析する 誌,19巻1 ことで、統合失調症患者家族 号,9-15 の病状ごとの精神的負担の特 徴を明らかにすること	過去10年間に刊行された発行 医中誌 看護学雑誌 研究における記述を分析する 誌,19巻1 ことで、統合失調症患者家族 号,9-15 の病状ごとの精神的負担の特 徴を明らかにすること	医中誌 [統合失調症と精神症状を伴う障害] [家族心理]	「発達」 「統合失調症」 「うつ」 「不安」 「家族機能」	18 (0+18)	記述なし	〈包含条件〉 ・タイトルと抄録の内容から研究目的 に合致するもの ・統合失調症患者の家族の精神的負担 についての事例を具体的に述べている もの	・病状や医療に対する精神的負担に関する研究 ・社会に対する精神的負担に関する研究 ・将来に対する精神的負担に関する研究 ・自宅介護に対する精神的負担に関する研究 ・家族に対する精神的負担に関する研究 ・自分自身に対する否定的感情に関する研究	・統合失調症を親にもつ子どもの精神的負担につ いての検討
8	長江ら,2013	日本赤十字 精神障がいを持つ親と共に生 活している子どもの生活状況 看護学雑誌 精神障がいの子どもの 生活状況と、その生活環境が子どもの 発達に与える影響について、医中誌 要,8巻1 成長発達に与える影響について、 号,83-96 て明らかにすること	日本赤十字 精神障がいを持つ親と共に生 活している子どもの生活状況 看護学雑誌 精神障がいの子どもの 生活状況と、その生活環境が子どもの 発達に与える影響について、医中誌 要,8巻1 成長発達に与える影響について、 号,83-96 て明らかにすること	Cinii [精神障がい] [親子] [養育環境] [心理社会的適応] [行動] [情緒]	「発達」 「統合失調症」 「うつ」 「不安」 「家族機能」	29 (8+21)	75 (26+49)**	〈包含条件〉 ・日本語または英語で執筆されたもの ・精神障がいの親と子どもに関する 内容を含むもの ・子どもの発達、情緒、行動、適応の 課題と親の精神障がいの関連について 述べたもの 〈除外条件〉 ・母親が精神障がいである場合の遺伝 を中心とした生物学的研究に関するもの	・母親が統合失調症の子どもの成長発達への影響に 関する研究 ・母親がうつ病の子どもの成長発達への影響に関 する研究 ・交差が精神障がい者である場合の子どもの成長発 達への影響に関する研究 ・精神障がいの親と暮らす子どもの体験に関する 研究	・日本における精神障がいの親と子どもの日常 生活の内容の検討 ・精神障がいの親とその子供の支援方法の検討
9	吉井ら,2013	東北大学 精神保健福祉分野や母性係数 医学部保健 精神で支援が必要な初産婦 健康学雑誌 失調症患者の母親に焦点を置 き、研究動向から、わが国に おける母親支援の課題を検討 すること	東北大学 精神保健福祉分野や母性係数 医学部保健 精神で支援が必要な初産婦 健康学雑誌 失調症患者の母親に焦点を置 き、研究動向から、わが国に おける母親支援の課題を検討 すること	「家族」 「母親」 「統合失調症」	「家族」 「母親」 「統合失調症」	7 (0+7)	1468 (0+1468)	〈包含条件〉 ・初産婦統合失調症患者の母親の自責感や苦悶などの ・母親の悩みなどの心理的支援についての検討 失調症患者の母親に関する研究 〈除外条件〉 ・症例報告と会議録であるもの	・初産婦統合失調症患者の母親の自責感や苦悶などの ・母親の悩みなどの心理的支援についての検討	・長期入院中の患者の家族に対する看護支援の検討 ・医療と福祉が連携した多専門職との協同方法につ いての検討 ・家族のストレスレベルに焦点をあてた検討
10	高橋ら,2014	岐阜大学 我が国の精神科看護領域にお ける現在の家族看護に関 する研究の動向を把握し、そ れらの研究で示されている知 見を整理し、今後の 採すべき課題を検討するこ と	岐阜大学 我が国の精神科看護領域にお ける現在の家族看護に関 する研究の動向を把握し、そ れらの研究で示されている知 見を整理し、今後の 採すべき課題を検討するこ と	「精神看護」 「家族看護」	「精神看護」 「家族看護」	30 (0+30)	565 (0+565)	〈除外条件〉 ・家族看護に関する研究 タイトル、研究目的から判別できない もの ・障害者の診断名が記されている場 合、依存症、認知症、小児、思春期、 発達障害、高次機能障害、身体疾患だ けに限定しているもの ・総説、症例報告、会議録、学会発表 の抄録、解説、特集であるもの ・目的、方法、結果、考察に相当する 明確な記載がないもの、あるいは記載 内容が妥当であると判断できないもの	・家族支援の現状に関する研究 ・外来看護師の家族支援ニーズのとりえ方に関する 研究 ・家族アセスメントツールの考案に関する研究 ・看護師の家族支援を通じた気づきに関する研究 ・家族が受けているケア・支援に関する研究 ・家族の情緒的負担感についての研究 ・長期入院している家族の困難感についての研究 ・長期入院している家族の困難感への支援の研究 ・家族の生活困難に関する研究 ・家族のQOLに関する研究	・長期入院中の患者の家族に対する看護支援の検討 ・医療と福祉が連携した多専門職との協同方法につ いての検討 ・家族のストレスレベルに焦点をあてた検討

No	著者名,出版年	出典	研究目的	データベース	キーワード	検索結果文献数 (国内+国外)	分析対象文献数 (国内+国外)	選定条件	結果	研究の履歴および今後の課題
11	丸本ら,2016	甲斐女子 大学研究 紀要,看護 学,リハ ビリテー ション学 編,11 号,33-38	精神障害者の就労における家 族の体験を問うた家族への 支援について、国内の現状に 関する文献を整理し、整理を明 らかにすることを目的とした	医中誌 CNii	「精神障害」 「就労」 「家族」 「家族教室」 「家族支援」	413 (0+413)	4 (0+4)	〈包含条件〉 ・精神障害者の就労において手厚い支援 の対象となっている統合失調症やうつ 病(うつ病、双極性障害)を対象としてい るもの ・論文に研究目的、方法、結果、考察に 相当する記載があるもの ・当事者の就労に関連する家族の体験や 家族支援について記述されたもの (除外条件) ・患者の診断名が発達障害、認知症、依 存症等を対象としたもの ・重複文献であるもの ・学術集会抄録であるもの	・当事者の就労に関する家族の思いに焦点を 当てた研究 ・家族支援に焦点を当てた研究	・就労における家族を対象とする実証検証的な取り組 みに関する検討 ・訪問看護や多職種訪問チーム、外来や各事業施設な どでの看護職員が行う実証の検討 ・精神障害者の就労に関わる家族へのリカバリ一志向 の支援方法の検討
12	木村ら,2017	猫田内科 大学看護 学部記 要,11 巻,41-55	1.統合失調症患者の家族支援 に関する文献を整理する 2.混乱時期における家族の体 験を明らかにする	医中誌 CNii	「統合失調症」 「家族」	1116 (0+1116)	51 (0+51)	〈包含条件〉 ・家族の体験が記述されたもの	・医療施設における個別の支援に関する研究 ・医療施設における集団的支援に関する研究 ・地域生活における個別の支援に関する研究 ・地域生活における集団的支援に関する研究 ・家族の役割の対立困難に関する研究	・家族を対象とした支援サービスの検討 ・医療施設から地域生活につながるような 家族の個別的な支援の体系化の検討 ・市町村や都道府県による家族単位への支援方法の検討 ・地域生活を患者と共に過ごす家族が、どのような回 復過程を体験しているのかについての検討
13	原田ら,2017	家族療法 研究,34巻 2号,208- 220	うつ病患者の家族がおかれて いる状況について文献を総観 し、うつ病患者の家族に書き やすい支援について検討する こと	医中誌 PubMed	「うつ病」 「家族」	記述なし	87 (0+87)	〈包含条件〉 うつ病の概念は大うつ病性障害にとどま らず、厳密に定義されていない「うつ」 や「うつ病」に関連するもの	・うつ病患者とその家族の関係に関する研究 ・うつ病患者の家族の負担感に関する研究 ・うつ病に対するステイタリズムに関する研究 ・うつ病患者の家族の体験に関する研究 ・家族以外の身内や友人からの支援について の研究 ・地域支援に関する研究 ・家族心理教育の研究 ・サポートグループ(家族会)についての研究	・医療者が家族から必要な情報やケアを求められるよ うな関係を構築したうえででの支援の検討(具体的に家族 を患者の支援者として捉えるのではなく能動的に面 した対象者であること認識を転換する) ・家族自身が自らの状況に応じて選択的に獲得できる 情報提供などの支援の検討(具体的には、ホームページ を作成し家族が情報収集できるようなシステムの構築 や安全性が担保されたチャットやビデオ通話を用いた 交流の工夫)
14	藤田,2019	東京女子 医科大学 看護学会 誌,14巻1 号,23-29	文献検討を通じて統合失調症 の子どもを持つ父親の体験を 理解し、今後の課題を明らか にすること	医中誌 CNii 国際IIビジュアル 研究者所属機関の 図書館の所蔵目録	「統合失調症」 「父親」 「体験」 「父子関係」 「家族」 「精神障害者」	432 (0+432)	39 (0+39)	〈包含条件〉 ・統合失調症の父親の体験について記述 されているもの (除外条件) ・父親の体験についてかかれていないもの ・母親の体験についてかかれていないもの ・病児の子どもにも関してかかれたもの ・母親が病児にかかっている子どもにも焦 点をあてたもの ・母子関係、患者-医師者関係のもの 介入研究であるもの	・父親が家族内で孤立してしまわないような専門職や ピアサポートによる連やかな支援の検討 ・父親が自らの体験を前定的に受け止めるための、父 親への語りを促す支援の検討	
合計						5,905 (1,231+4,674)	615 (170+445)			

\*1の文献は3つの研究方法に基づいて行われていたが、精神障害者の家族に関する内容だけを一部抜粋した

\*2国外文献に関しては、1940～2004年までを半澤(2005)の文献を参考にしたため抽出数の記述なし

\*3データベースからの数ではなく、選定条件後の数

\*4それぞれ国外文献に関しては除外条件、国内文献に関しては除外条件のみの記載であった

### 3) データベースについて

データベースについて記述ありが12件 (No. 1, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 14) であった。その内訳は、(1) 医中誌が10件 (No. 1, 5, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 14), (2) CiNiiが5件 (No. 4, 5, 8, 12, 14), (3) Pub Medが2件 (No. 6, 13), (4) PsycINFOが2件 (No. 4, 5), (5) CINAHLが2件 (No. 5, 8), (6) MEDLINEが2件 (No. 5, 8), (7) その他が1件 (No. 14) であった。単一のデータベースのみは6件 (No. 1, 6, 7, 9, 10, 11) であった。

### 4) 検索キーワードについて

キーワードについて記述ありが12件 (No. 1, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 14) であった。「家族」が8件 (No. 1, 4, 5, 9, 11, 12, 13, 14), 「家族心理」が1件 (No. 7), 「家族機能」が1件 (No. 8), 「家族看護」が1件 (No. 10), 「家族教室」が1件 (No. 11), 「家族支援」が1件であった。疾患に関するキーワードのうち「精神障がい」や「精神症状」が6件 (No. 4, 5, 7, 8, 11, 14), 「統合失調症」が6件 (No. 4, 5, 8, 9, 12, 14), 「うつ」を含めたそのほかの疾患が3件 (No. 5, 8, 13) であった。英語のキーワードについて記載があったものは3件 (No. 4, 5, 6) であった。

### 5) 検索結果数及び分析対象文献数について

検索結果数について記述ありが8件 (No. 4, 5, 8, 9, 10, 11, 12, 14) であった。レビュー論文に記述されている検索結果数および分析対象文献数の合計はそれぞれ5,905件 (国外文献: 1,231件, 国内文献: 4,674件) と615件 (国外文献: 170件, 国内文献: 445件) であった。

### 6) 選定条件について

選定条件について記述されているものは11件 (No. 1, 4, 5, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 14) あり, 包含条件が5件 (No. 4, 5, 7, 8, 9, 11, 12, 13, 14), 除外条件が7件 (No. 1, 5, 8, 9, 10, 11, 14) であった。

### 7) 研究テーマ (表2参照)

研究テーマについては以下の5つの内容が抽出された。(1) 家族関係と患者の疾患の関係性に着目した研究 (No. 2, 3, 4, 13), (2) ケアを通しての経験や体験についての研究 (No. 2, 3, 4, 5, 8, 13, 14), (3) 負担感や困難感を中心とした家族の思いに関する研究 (No. 1, 2, 3, 4, 6, 7, 9, 10, 11, 12, 13), (4) 家族支援に関する研究 (No. 1, 4, 10, 11, 12, 13), (5) 家族の続柄に焦点を当てた研究 (No. 4, 8, 14) であった。

#### (1) 家族関係と患者の疾患の関係性に着目した研究

家族関係と患者の疾患の関係性については, 半澤

(2005), 中坪 (2008), 田野中 (2011), 原田ら (2017) の結果から3つのテーマが抽出された。1950年代前後に米国を中心に実施された家族病因論説研究 (No. 2, 3, 4), 1970年代前後に英国を中心に実施された家族の感情表出研究 (No. 2, 3, 4), うつ病患者とその家族のうつ病の罹患に関する研究 (No. 13) である。家族病因論説研究は家族の言動や家族関係が精神障害者, 特に統合失調症患者に悪影響を与えるという研究である。また家族の感情表出研究は, 家族の情緒的発言が退院後の統合失調症患者の再発に影響を及ぼすという研究である。

#### (2) ケアを通しての体験についての研究

ケアを通しての体験は, 半澤 (2005), 中坪 (2008), 田野中 (2011), 蔭山 (2012), 長江 (2013), 原田ら (2017), 徳田 (2019) の結果から2つのテーマが抽出された。家族のケア経験についての研究 (No. 2, 3, 4, 5), 家族のケア体験についての研究 (No. 8, 13, 14) である。

#### (3) 負担感や困難感を中心とした家族の思いに関する研究

負担感や困難感を中心とした家族の思いについては, 甘佐ら (2005), 半澤 (2005), 中坪 (2008), 田野中 (2011), 酒井 (2013), 平ら (2013), 吉井ら (2013), 高橋ら (2014), 丸本ら (2016), 木村ら (2017), 原田ら (2017) の結果から3つのテーマが抽出された。ケアを行う中で感じる思いや心理過程の研究 (No. 3, 4, 11), 介護負担感に関する研究 (No. 2, 4, 6, 7, 9, 10, 13), 家族の困難感に関する研究 (No. 1, 4, 6, 10, 12) である。

#### (4) 家族支援に関する研究

家族支援に関する研究は, 甘佐ら (2005), 田野中 (2011), 高橋ら (2014), 丸本ら (2016), 木村ら (2017), 原田ら (2017) の研究結果から3つのテーマが抽出された。外来看護師の家族支援ニーズのとらえ方や家族への心理教育の研究を含めた病院における家族支援の研究 (No. 1, 4, 10, 12, 13), ACT (Assertive Community Treatment, 包括型地域生活支援プログラム) を中心とした支援の現状や保健師の個別支援の研究を含めた地域における家族支援の研究 (No. 4, 10, 11, 12, 13), そしてサポートグループや家族会, 身内, 友人などを含めた医療職以外から受ける支援の研究 (No. 4, 12, 13) である。

#### (5) 家族の続柄に焦点を当てた研究

家族の続柄に焦点を当てた研究については田野中 (2011), 長江ら (2013), 徳田 (2019) より3つのテーマが抽出された。精神障害の親を持つ子どもに焦点を当てた研究 (No. 4, 8, 14), 精神病の子どもを持つ父親の体験を含めた精神障害の子どもを持つ親に焦点を当てた研究 (No. 4, 14) である。

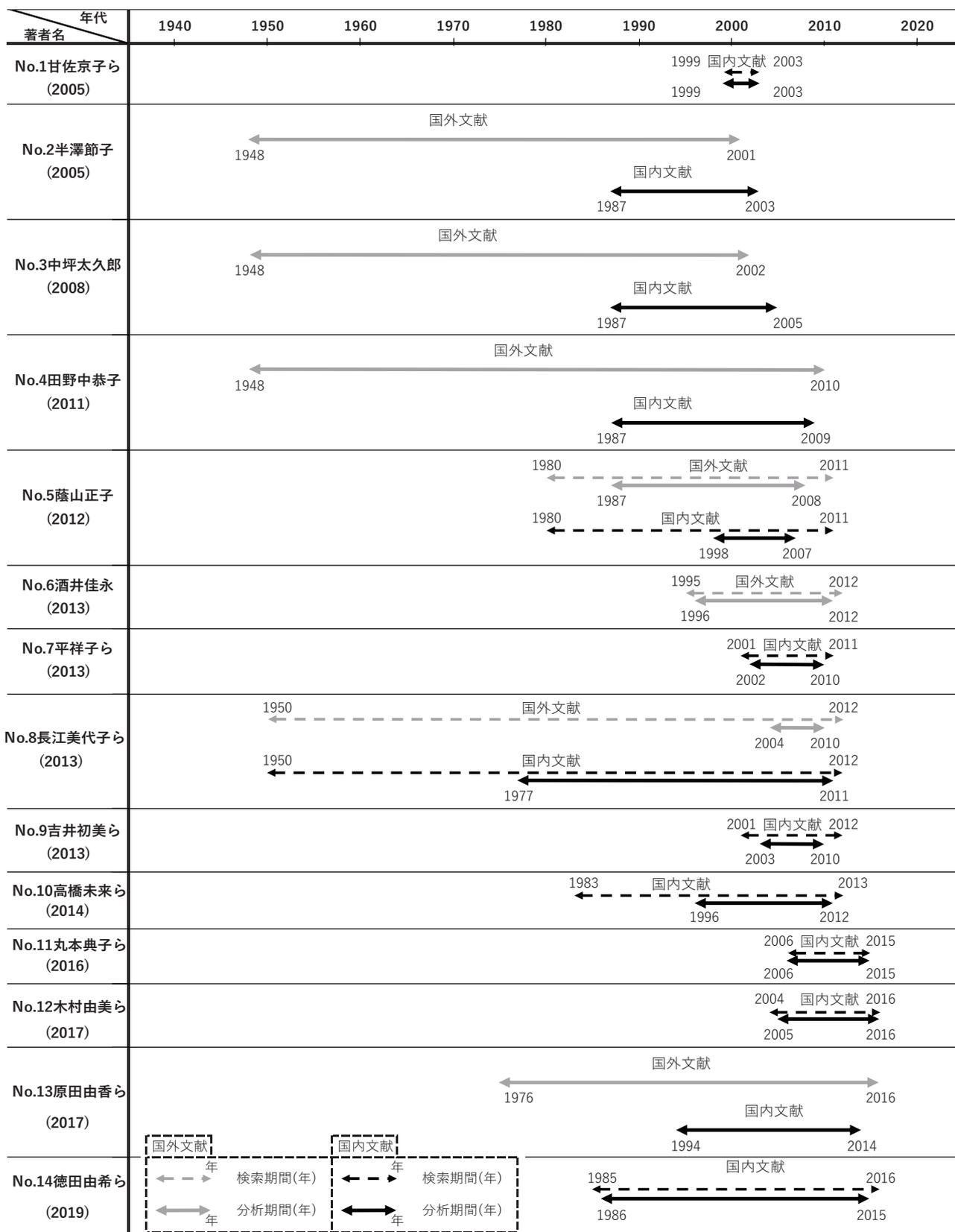


図2 対象文献の検索期間および分析期間一覧

表2 研究テーマの内容

カテゴリ	サブカテゴリ	レビュー論文の抽出内容
家族関係と患者の疾患の関 係に着目した 研究	家族病院論説研究	・1940年代から1960年代に米国を中心に行われた家族病因論を仮説とした研究(No.2,3,4)
	感情表出研究(EE研究)	・1960年代から1980年代に英国を中心にヨーロッパや米国、インド、日本などで行われた感情表出研究(EE研究)(No.2,3,4)
	うつ病患者とその家族のうつ病の罹患に関する研究	・うつ病患者とその家族のうつ病の罹患に着目した研究(No.13)
ケアを通しての体験について の研究	家族のケア経験についての研究	・1990年代から2000年代に英国で行われた家族の介護経験評価についての研究(No.2,3,4) ・家族が患者をケアする経験の過程と影響要因についての研究(No.5)
	家族のケア体験についての研究	・精神障がい者の親と暮らす子どもの体験についての研究(No.8) ・うつ病患者の家族の体験に関する研究(No.13) ・統合失調症の子どもを持つ父親の体験についての研究(No.14)
負担感や困難感を中心とした家族の思いに関する研究	ケアを行う中で感じる思いや心理過程の研究	・家族の心理プロセスについての研究(No.3,4,10) ・家族の心理や生活に着目した研究(No.4) ・当事者の就労についての家族の思いについての研究(No.11)
	介護負担感に関する研究	・1980年代以降の日本で行われた介護負担感の研究(No.2) ・1990年代から2000年代のイタリアを中心に行われた介護負担感についての研究(No.2,4) ・双極性障害における介護負担の程度と関連要因についての研究(No.6) ・双極性障害における介護負担が引き起こされるプロセスについての研究(No.6) ・双極性障害における介護負担の患者や家族への影響についての研究(No.6) ・家族の情緒的負担感についての研究(No.7,9,10) ・うつ病患者における介護負担感についての研究(No.13)
	家族の困難感に関する研究	・家族の困難に対しての医療者へのニーズの研究(No.1) ・家族の困難とその対処についての研究(No.4,10) ・双極性障害の家族の対処および必要とされているサポートについての研究(No.6) ・長期入院している家族の困難と受けているケア・支援についての研究(No.10) ・患者の変調に対する対処困難についての研究(No.12)
家族支援に関する研究	病院における家族支援の研究	・長期入院患者の社会復帰に向けての研究(No.1) ・家族への心理教育を含めた医療施設における集団支援についての研究(No.1,12) ・ニュージーランドで行われた医療職と家族の関係についての研究(No.4) ・看護職者が実施している家族支援の現状についての研究(No.4,10) ・外来看護師の家族支援ニーズの捉え方についての研究(No.10) ・急性期の家族をアセスメントするツールの考案についての研究(No.10) ・入院患者の家族が望むケアについての研究(No.10) ・心理的支援や情報提供を含めた医療施設における個別支援についての研究(No.12) ・うつ病の家族への心理教育についての研究(No.13)
	地域における家族支援の研究	・家族への生活の支援を含めた地域における個別支援についての研究(No.4,12) ・地域生活において家族が受けているケア・支援についての研究(No.10,13) ・患者の就労支援場面における家族支援についての研究(No.11)
	医療職以外から受ける支援の研究	・家族会の効果や支援についての研究(No.4,12) ・家族以外の身内や友人からの支援についての研究(No.13) ・うつ病のサポートグループの支援の効果についての研究(No.13)
家族の続柄に焦点を当てた研究	精神障害の親を持つ子どもに焦点を当てた研究	・海外で行われている精神病の親を持つ子どもに焦点をあてた研究(No.4) ・母親が統合失調症の場合の子どもの成長発達への影響についての研究(No.8) ・母親がうつ病の場合の子どもの成長発達への影響についての研究(No.8) ・父親が精神障がい者の場合の子どもの成長発達への影響についての研究(No.8) ・精神障がい者の親と暮らす子どもの体験についての研究(No.8)
	精神障害の子どもを持つ親に焦点を当てた研究	・日本で行われている精神病を子どもにもつ親(特に母親)に焦点をあてた研究(No.4) ・統合失調症の子どもを持つ父親の体験についての研究(No.14)

## 8) 研究の展望および今後の課題 (表3参照)

研究の展望および今後の課題については4つのテーマが抽出された。(1)家族のストレンクスを生かした支援の検討 (No.1, 3, 4, 5, 10, 11, 12, 13), (2)家族の経験や状況を踏まえた支援の検討 (No.1, 2, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 13, 14), (3)日本文化を踏まえた支援の検討 (No.2, 4, 5, 8), (4)社会資源を活用した支援の検討 (No.1, 4, 10, 11, 12) である。

## (1) 家族のストレンクスを生かした支援の検討

家族のストレンクスを生かした支援の検討は甘佐 (2005), 中坪 (2008), 田野中 (2011), 蔭山 (2012), 高橋ら (2013), 丸本ら (2016), 木村ら (2017), 原田ら (2017) のレビュー論文から2つのテーマが抽出された。一つ目はストレンクスなどに焦点をあてた家族の体験や経験の検討 (No.3, 4, 5, 10, 12), 2つ目は家族のストレンクスを引き出す支援方法の検討 (No.1, 5, 11, 13) であった。

表3 研究の展望および今後の課題の内容

カテゴリ	サブカテゴリ	レビュー論文の抽出内容
家族のストレンクスを生かした支援の検討	ストレンクスなどに焦点を当てた家族の体験や経験の検討	<ul style="list-style-type: none"> <li>・家族のエンパワメントやストレンクス、回復力、希望を支える要素の検討(No.3,4,10)</li> <li>・家族が経験の過程を発展的に進めない要因とその作用機序の検討(No.5)</li> <li>・経験の終盤における、「現実的な希望」以外の経験の検討(No.5)</li> <li>・地域生活を患者と共に過ごす家族が、どのような回復過程を体験しているかの検討(No.12)</li> </ul>
	家族のストレンクスを引き出す支援方法の検討	<ul style="list-style-type: none"> <li>・入院中の患者の家族が安寧を得て、教育や指導を受け入れる力を呼び起こす支援の検討(No.1)</li> <li>・家族が経験の過程を発展的に進むことができるような支援方法の検討(No.5)</li> <li>・精神障害者の就労に関わる家族へのリカバリー志向に関する支援の検討(No.11)</li> <li>・インターネットを含めた家族が自らの状況に応じて情報を獲得できるような支援の検討(No.13)</li> </ul>
家族の経験や状況を踏まえた支援の検討	家族の続柄を踏まえた支援の検討	<ul style="list-style-type: none"> <li>・家族成員の特性別の困難を明らかにし、それぞれのニーズに合わせた支援方法の検討(No.4)</li> <li>・双極性障害患者の家族の続柄による負担感の違いについての検討(No.6)</li> <li>・統合失調症を親にもつ子どもの精神的負担についての検討(No.7)</li> <li>・日本における精神障がい親とその子どもの日常生活の内容の検討(No.8)</li> <li>・精神障がいの親とその子供の支援方法の検討(No.8)</li> <li>・母親の悩みなどの心理的支援についての検討(No.9)</li> <li>・父親が家族内で孤立しないような専門職やピアサポートによる速やかな支援方法の検討(No.14)</li> <li>・父親が自らの体験を肯定的に受け止めるための支援方法の検討(No.14)</li> </ul>
	家族の状況に合わせた支援の検討	<ul style="list-style-type: none"> <li>・混乱に陥っている家族が早期の家族教育を受け入れることができるような支援方法の検討(No.1)</li> <li>・受診までの期間に合わせた支援方法の検討(No.1)</li> <li>・双極性障害患者を介護する家族の負担感を適切に評価できる尺度の開発についての検討(No.6)</li> <li>・長期入院中の患者の家族に対する看護支援の検討(No.10)</li> <li>・研究で明らかになっている実践内容の有効性の検討(No.10)</li> <li>・医療者が家族から必要な情報やケアを求められるような信頼関係の構築についての検討(No.13)</li> </ul>
	家族の経験している内容についての検討	<ul style="list-style-type: none"> <li>・介護負担感の変容プロセスの検討(No.2)</li> <li>・現象学を含めた多様な学問や研究方法を用いた家族理解のさらなる検討(No.4)</li> <li>・診断前の家族の経験、および専門家や支援システムに関する家族の経験の検討(No.5)</li> <li>・統合失調症以外の疾患の患者を包含した家族のケア経験全般の検討(No.5)</li> </ul>
日本文化を踏まえた支援の検討	日常生活や文化の中での家族の経験や体験の検討	<ul style="list-style-type: none"> <li>・家族の状況に対する地域の文化背景による比較検討(No.2)</li> <li>・日本の文化に関連した家族の経験の検討(No.5)</li> <li>・日本における精神障がいの親とその子どもの日常生活の内容の検討(No.8)</li> </ul>
	日本の家族の文化に適した支援方法の検討	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本の家族介護の現状を考慮した家族会プログラムの内容の検討(No.4)</li> </ul>
社会資源を活用した支援の検討	医療と福祉の連携についての検討	<ul style="list-style-type: none"> <li>・医療と福祉が連携した多専門職との協同方法についての検討(No.10)</li> <li>・医療施設から地域につなぐ家族の個別的な支援の体系化の検討(No.12)</li> </ul>
	専門職・自治体等による支援の検討	<ul style="list-style-type: none"> <li>・家族が実際に必要としている具体的な社会資源の内容や在り方についての検討(No.4)</li> <li>・心理教育の中で看護師が実施することが有用であると考えられる部分の検討(No.1)</li> <li>・訪問看護や各事業施設などで看護師が行う実践内容の検討(No.11)</li> <li>・精神障害者の就労における家族を対象とする支援方法の検討(No.11)</li> <li>・市町村や都道府県による家族単位への支援方法の検討(No.12)</li> </ul>

## (2) 家族の経験や状況を踏まえた支援の検討

家族の経験や状況を踏まえた支援の検討は甘佐 (2005), 半澤 (2005), 田野中 (2011), 蔭山 (2012), 酒井 (2013), 平ら (2013), 長江ら (2013), 吉井ら (2013), 高橋ら (2013), 原田ら (2017) 徳田 (2019) のレビュー論文から3つのテーマが抽出された。1つ目は家族の続柄を踏まえた支援の検討 (No. 4, 6, 7, 8, 9, 14), 2つ目は家族の状況に合わせた支援の検討 (No. 1, 6, 10, 13), 3つ目は家族の経験している内容についての検討 (No. 2, 4, 5) であった。

## (3) 日本の文化を踏まえた支援の検討

日本の文化を踏まえた支援の検討は半澤 (2005), 田野中 (2011), 蔭山 (2012), 長江ら (2013) の研究のレビュー論文から2つのテーマが抽出された。1つ目は日常生活や文化の中での家族の経験や体験の検討 (No. 2, 5, 8), 2つ目は日本の家族の文化に適した支援方法の検討 (No. 4) であった。

## (4) 社会資源を活用した支援の検討

社会資源を活用した支援の検討は甘佐 (2005), 田野中 (2011), 高橋ら (2014), 丸本ら (2016), 木村ら (2017) のレビュー論文から2つのテーマが抽出された。1つ目は医療と福祉の連携についての検討 (No. 10, 12), 2つ目は専門職・自治体等による支援の検討 (No. 1, 4, 11, 12) であった。

## 5. 考察

### 1) 精神障害者の家族研究の動向と現状

検索期間を設定していなかったにもかかわらず分析対象となった14レビュー論文は、すべて2005年以降に発表されていた。その中でも、分析対象範囲を50年以上とした半澤 (2005), 中坪 (2008) の2論文では、国内外における精神障害者の家族研究の動向と課題が検討されていた。同様に網羅的に文献検討を行っている田野中 (2011), 高橋 (2014), 木村 (2017) の内容はいずれも半澤 (2005) および中坪 (2008) の成果を前提として実施されていた。蔭山 (2012) 以降、現在に至るまでは、既述したような総括的な検討が少なくなり、あるテーマに特化したレビュー報告に変化していた。以上、研究の動向をみていくと半澤 (2005), 中坪 (2008) は、精神障害者の家族研究の動向を明示したといえる。そして、半澤 (2005), 中坪 (2008) 以降、一部のレビュー論文を除き、総括的なテーマとしたものは少なく、特定のテーマに絞ったレビューが多くみられた。

テーマの中で特に多かったものは、負担感や困難感を中心とした家族の思いに関する研究 (No. 1, 2, 3, 4,

6, 7, 9, 10, 11, 12, 13) である。精神障害者の家族の負担感や困難感を検討した研究者は多く、様々な知見が得られている (岩崎, 1998; 藤野ら, 2009; 半澤, 2009; 半澤ら, 2009, 2008; 松田ら, 2013; 川口, 2014)。この背景には、精神障害者の生活を支えるための多くの責任をこれまで家族が担っていたことが関連している。精神保健福祉法への改正により、保護者の義務が軽減されたことは家族にとって重要ではあるが、家族が治療協力者そして福祉提供者として機能することが期待されているのは現在まで変わらない (佐々木ら, 2003)。我が国では施設収容から地域生活支援の推進という流れはあるものの、社会資源の不足から精神障害をもつ当事者のための選択肢は少なく、治療上の支援、経済的扶養、活動の場の確保など精神障害者の生活を家族に大きく負っている状況 (佐々木ら, 2003) は現在まで続いている。以上のような理由により家族の負担感や困難感を明らかにすることを目的とした研究が実施されていたと考えられる。

次に研究テーマとして多かったのが家族の支援に関する研究 (No. 1, 4, 10, 11, 12, 13) であり、長期入院患者を抱えた家族や急性期の患者の家族の支援、地域生活や就労における家族支援、家族以外の周囲の人々からの支援などが検討されていた。続柄に着目した支援に関する研究 (No. 4, 8, 14) では、これまでほとんど注目されてこなかった精神障害者を親にもつ子どもに着目した研究が取り上げられるようになってきていることも明らかになった。

現在、精神保健政策の地域医療への変化や (厚生労働省, 2004), 核家族化, 単身世帯, 貧困世帯の増加といった経済状況や家族の在り方の変化 (鈴木ら, 2017) など、患者や家族を取り巻く様々な環境が変化している。高齢の親が中高年の引きこもりの子どもの生活を支え行き詰まる8050問題も注目されている (厚生労働省, 2019)。佐々木ら (2003) が指摘しているように、介護保険の導入に伴い高齢者介護が家族から社会介護へと価値転換を果たしてきたように、精神障害者の支援においても家族をケアの担い手としてステレオタイプにとらえるのではなく、家族による支援から社会における支援へとパラダイム転換を図ることが期待される。

### 2) 精神障害者の家族研究の今後の方向性

検討を通して明らかになった研究課題としては、家族のストレングスを活かした支援の検討、家族の経験や状況を踏まえた支援の検討、日本文化を踏まえた支援の検討、社会資源を活用した支援の検討の4つに集約された。これまでは負担感や困難感といった一側面から家族をとらえる研究が多数報告されている (岩崎, 1998; 藤野, 2009; 半澤, 2009; 半澤ら, 2009, 2008; 松田ら,

2013) が、今後の課題としてレジリエンスやエンパワメントなどの家族のストレンクスも含めた多様な視点から家族をとらえる研究の必要性が指摘されていた (No. 1, 3, 4, 5, 6, 10, 11, 12, 13)。Szmuklerら (1996) は家族をより包括的にとらえるために、負担感からだけでなくストレス・コーピング・モデルを基に家族のストレンクスを含めた経験を明らかにしている。Szmuklerら (1996) は、負担感のみに焦点をあてて家族を評価することは、負担感以外のケアのやりがい等の評価が含まれないため、家族の包括的な理解を妨げるとしている。中平ら (2016a; 2016b) は、家族が患者をケアするなかで家族なりに絶望的な状況から立ち直るレジリエンスを発揮し、奮闘する様相を明らかにした。小西ら (2018) は、統合失調症患者の親が認識している家族のケアの継続要因として、「子に対する愛情・責任・希望」を含めた11カテゴリを報告している。このように、家族は負担感や困難感などの否定的要因以外にも様々な経験をしている。ストレンクスなどにも焦点を当てることにより、精神障害者のケアをしている家族の多様な経験を理解し、また、効果的な家族支援につなげていくことが可能となると考えられる。以上より、これまでの研究成果を考慮しながらもストレンクスを含めた多様な側面から家族をとらえていく必要性が示唆された。

従来、我が国の精神障害者の家族研究では、母親を中心とした親が対象となっていた (佐藤, 2006; 平ら, 2013; 青木, 2014)。精神疾患の中でも最も多くを占める統合失調症の発症が精神的にも経済的にも親から自立する青年期であり (野村ら, 2015)、保護者である親でも特に母親が介護者になることが多いためと考えられる。すなわち、研究対象者は家族とあるが、実際には親、しかも母親であることがほとんどであった。しかし、近年、家族の多様化や社会格差の増大 (森口, 2017; 鈴木ら, 2017) などの理由により、たとえば父親は働き専業主婦である母親が病者である身内の世話をするというような標準的な家族を前提にし、精神障害者をケアする家族としてとらえる見方には限界がある。このため今後、配偶者や子供、同胞など各統柄の家族が抱える困難にも着目していく必要がある。田野中 (2019) は、精神疾患の親を持つ子どもの困難を子どもの全世代に共通する困難と学童期から思春期にかけて特徴的な困難、青年期以降に特徴的な困難を明らかにしている。以上より親 (母親) に限定しない、様々な統柄に焦点を当てたより詳細な家族の実態およびその現状に合わせた支援の検討が求められる。

今回、国内と国外の文献を通して検討したレビュー論文は6件 (No. 2, 3, 4, 5, 8, 13) であった。そのうち4件 (No. 2, 4, 5, 8) で日本の文化に適した支援の必要性を指摘していた。Clearyら (2020) は宗教や

文化に関連した精神障害者の家族の経験を明らかにしている。また、Camposら (2017) は、東アジア人の文化的な背景が健康に及ぼす影響についてレビューを行い、研究者が自分の研究に文化の多様性を考慮することの必要性を指摘している。これらのことから、日本の文化的な背景をとらえた家族支援とは何かを検討することは、新たな視点で家族をとらえる上で重要といえる。日本文化に焦点を当てた精神障害者の家族研究が、Mizunoら (2011) およびAmagaiら (2016) により海外雑誌にて報告されている。日本を含めたアジア諸国では西洋諸国と比べ家族同士のつながりが強いということを踏まえると、今後は日本の文化的な背景を考慮した上での家族の理解および家族支援の検討が求められる。

今回検討したレビュー論文では、家族と患者の疾患の関係性に着目した研究 (No. 2, 3, 4, 13)、患者のケアを通しての家族の体験についての研究 (No. 2, 3, 4, 5, 8, 13, 14)、患者に関わる上での負担感や困難感を中心とした家族の思いに関する研究 (No. 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 9, 10, 11, 12, 13) といった、患者をケアする中で起きている問題について検討しているテーマが多くみられた。加えて、家族支援に関する研究テーマ (No. 1, 4, 10, 11, 12, 13) においても患者の就労支援を支える家族への支援 (No. 11) といった患者を支える家族に起きる問題について検討しているものが多くみられた。以上の背景は、これまでの精神障害者の家族研究が、家族を「精神障害をもつ身内の世話をする存在」という前提でとらえていたからだと考えられる。これについては、統合失調症の家族の感情表出研究の成果 (伊藤ら, 1994) より、家族が患者とほどよい距離を保ちつつ家族自身の生活を大事にすることが再発予防になるとのエビデンスが我が国でも広がり、家族を対象とした心理教育による支援が普及したことが影響している (半澤, 2005)。ここでいう家族自身の生活を大事にすることは、あくまでも患者の再発予防のために家族がどうあるとよいのか、患者をケアする関係の中で、家族が、患者に影響を与える存在であるという前提があると考えられる。

看護や医療の領域では当たり前としているこの前提に社会学や女性学が疑問を投げかけている。上野ら (2008) は、家族のケアする権利とケアしない権利について考察している。ここでいうケアしない権利とは家族の外部 (公的な支援等) に、障害を持つ者の具体的な支援を確保しそのアクセスを保証することであり、家族の外部に多様なニーズに応じた家族のケアを代替・分有するサービスを十分確保することを通じて保証される権利である。つまり、家族を「精神障害をもつ身内の世話をする存在」と捉えない支援の必要性について指摘している。加えて伊藤 (2017) は、精神障害者の家族支援の在り方の一つとして、精神障害者本人との関係に限定せずに、家族自

身に目を向けた「人としての家族」を捉えた上で家族支援を行う必要性について述べている。この中では、本人を支えたいという気持ちも大切にされ、自分の人生を生きたいということも保障される。「精神障害をもつ身内の世話をする存在」として家族を捉えず、「人として」支えられることが今後の精神障害者の家族支援においては重要であると考えられる。

本稿では、看護研究者による家族研究論文を中心に検討してきたが、精神障害者にも対応した地域包括支援システムが整備され始め（厚生労働省、2020）、精神障害者を地域で支えていこうとしている今日、家族は「精神障害をもつ身内の世話をする存在」という前提にとらわれない、支援方法を検討することも、今後の家族研究の課題と考える。

## 6. 結論

精神障害者の家族に関するレビュー論文14件を検討した結果、近年では研究テーマを絞ったものが増えてきていることが明らかになった。また、研究テーマについては6カテゴリに分類することができ、家族の負担感や困難感に焦点を当てたものが多かった。今後の研究課題としては、家族のストレングスやレジリエンスといった多様な側面からとらえた支援の検討や家族の統柄による経験の内容や支援の検討、患者を支える家族にとらわれない家族支援の探求の必要性が示唆された。

本研究の一部は第40回日本看護科学学会(2020年12月)で発表した。

## 利益相反

本論に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。

## 引用文献

Amagai, M., Takahashi, M., & Amagai, F. (2016). Qualitative study of resilience of family caregivers for patients with schizophrenia in Japan. *Mental Health in Family Medicine*, 12, 307-312.

甘佐京子, 比嘉勇人, 牧野耕次, 松本行弘. (2005). 日本における精神科急性期看護の家族ケアに関する文献研究. *人間看護研究*, 2, 53-59.

甘佐京子, 川口優子. (2013). 精神科看護師による急性期にある精神疾患患者の家族への看護. *人間看護研究*, 11, 11-19.

青木秀光. (2014). 統合失調症の娘を抱える父親のライフストーリー / 個人の複雑な生の一端をとらえるた

めに. *Core Ethics :コア・エシックス*, 10, 1-12.

Campos, B., & Kim, H. S. (2017). Incorporating the cultural diversity of family and close relationships into the study of health. *The American Psychologist*, 72 (6), 543-554.

Cleary, M., West, S., Hunt, G. E., McLean, L., & Kornhaber, R. (2020). A qualitative systematic review of caregivers' experiences of caring for family diagnosed with schizophrenia. *Issues in Mental Health Nursing*, 41 (8), 667-683.

藤野成美, 山口扶弥, 岡村仁. (2009). 統合失調症患者の家族介護者における介護経験に伴う苦悩. *日本看護研究学会雑誌*, 32 (2), 35-43.

濱田由紀, 田中恵美子, 横山恵子, 田上美千佳, 小山達也, 新村順子. (2007). 長期入院精神障害者の家族の経験—退院促進および地域生活維持のために求められる家族への看護援助の検討—. *日本精神保健看護学会誌*, 16(1), 49-59.

半澤節子. (2005). 精神障害者家族研究の変遷—1940年代から2004年までの先行研究—. *人間文化研究*, 3, 65-89.

半澤節子. (2009). 統合失調症患者の家族の介護負担感—介護負担感を軽減する効果的な家族支援とは—. *日本社会精神医学会雑誌*, 17(3), 287-295.

半澤節子, 田中悟郎, 稲富宏之, 太田保之. (2009). 統合失調症の母親の介護負担感に関連する要因: 患者の性別による比較. *精神障害とリハビリテーション*, 13(1), 79-87.

半澤節子, 田中悟郎, 後藤雅博, 永井優子, 関井愛紀子, 田上美千佳, 太田保之. (2008). 統合失調症患者の母親の介護負担感に関連する要因—家族内外の支援状況と家族機能の関連—. *日本社会精神医学会雑誌*, 16(3), 263-27.

原田由香, 吉野淳一. (2017). うつ病患者の家族への支援に関する文献的研究. 34, 208-220.

伊藤千尋. (2017). 精神保健福祉領域における家族支援のあり方に関する研究—統合失調症の—子をもつ母親の語りから—. 東洋大学社会福祉学博士論文.

伊藤順一郎, 大島巖, 岡田純一, 永井将道, 榎本哲郎, 小石川比良来, 柳橋雅彦, 岡上和雄. (1994). 家族の感情表出 (EE) と分裂病患者の再発との関連—日本における追視研究の結果. *精神医学*, 36(10), 1023-1031.

岩崎弥生. (1998). 精神病患者の家族の情緒的負担と対処方法. *千葉大学看護学部紀要*, 20, 29-40.

蔭山正子. (2012). 家族が精神障害者をケアする経験の過程—国内外の文献レビューに基づく共通段階. *日本看護科学学会誌*, 32(4), 63-70.

- 川口めぐみ, 長谷川美香, 出口洋二. (2014) 退院1年未満の統合失調症患者を介護している親の介護負担感の関連要因. 家族看護学研究, 20(1), 2-12.
- 川崎洋子. (2012). 保護者制度の課題—精神障害者とその家族の人権を確保するために—. 精神神経学雑誌, 114(4), 408-414.
- 木村由美, 中川佑架, 天賀谷隆. (2017). 混乱時期における統合失調症患者の家族の体験. 協坂医科大学看護学部紀要, 11, 41-55.
- 小西美里, 田村文子, 板田苗恵. (2018). 統合失調症患者の親が認識している家族によるケアの継続を支えるもの. 精神障害とリハビリテーション, 22(2), 148-155.
- 厚生労働省. (2004). 精神保健医療福祉の改革ビジョン(概要).
- 厚生労働省. (2011). 平成21年精神科病院退院患者の退院先の状況.
- 厚生労働省. (2017). 「これからの精神保健医療福祉のあり方に関する検討会」報告書.
- 厚生労働省. (2019). ～地域包括支援センターにおける「8050」事例への対応に関する調査～報告書.
- 厚生労働省. (2020). 精神障害者にも対応した地域包括ケアシステム構築のための手引き: 第一章: 精神保健医療福祉政策の動向と精神障害にも対応した地域包括ケアシステム.
- 松田陽子, 船越明子, 北恵都子, 羽田有紀. (2013). 精神障害者を抱える家族の精神的健康に影響を与える要因の検討. 三重県立大学紀要, 17, 59-65.
- 丸本典子, 吉原未佳, 松岡純子. (2017). 精神障害者の就労における家族への支援に関する文献検討. 甲南女子大学研究紀要 看護学・リハビリテーション学編, 11, 33-38.
- Mizuno, E., Iwasaki, M., & Sakai, I. (2011). Subjective experiences of husbands of spouses with schizophrenia: An analysis of the husbands' descriptions of their experiences. Archives of Psychiatric Nursing, 25(5), 366-375.
- 森口千晶. (2017). 日本は「格差社会」になったのか: 比較経済史にみる日本の所得格差. 経済研究, 68(2), 169-189.
- 長江美代子, 土田幸子. (2013). 精神障がい者の親と暮らす子どもの日常生活と成長発達への影響. 日本赤十字豊田看護大学紀要, 8(1), 83-96.
- 中平洋子, 野嶋佐由美. (2016a). 精神障がい者の家族のFamily Resilienceとしての「Living System力の発現」. 家族看護学研究, 22(1), 2-14.
- 中平洋子, 野嶋佐由美. (2016b). 精神障がい者の家族のFamily Resilience—家族内のエネルギーを創生するCompetencyに焦点を当てて—. 高知女子大学看護学会誌, 42(1), 22-32.
- 中坪太二郎. (2008). 統合失調症の家族研究の展望. 東京大学大学院教育学研究科紀要, 48, 203-211.
- 野村総一郎, 樋口輝彦(監). (2017). 標準精神医学第6版. 医学書院.
- 佐々木裕子, 早川由美 (2003). 精神障害者の家族支援についての文献研究—歴史的経緯と当事者研究から支援の方向性を探る—, 人間文化研究, 1, 93-108.
- 佐藤朝子. (2006). 精神障害者を子にもつ母親の体験—女性の生活史の視点から—. 日本赤十字看護大学紀要, 20, 1-10.
- 酒井佳永. (2013). 双極性障害患者を介護する家族が体験する介護負担に関する文献的研究. 跡見学園女子大学文学部臨床心理学科紀要, 1, 107-119.
- 杉森美和子. (2017). 精神疾患における患者の家族への役割期待—全国精神障害者加増連合会の活動を中心に—. 東京大学大学院教育学研究科紀要, 57, 399-408.
- 鈴木和子, 渡辺裕子. (2017). 家族看護学—理論と実践—第4版. 日本看護協会出版会.
- Szmukler, G. I., Burgess, P., Herrman, H., Bloch, S., Benson, A., & Colusa, S. (1996). Caring for relatives with serious mental illness: The development of the experience of caregiving inventory. Social Psychiatry and Psychiatric Epidemiology, 31 (3-4), 137-148.
- 平祥子, 心光世津子, 遠藤淑美. (2013). 日本における統合失調症患者家族の統柄ごとの精神的負担の特徴: 過去10年間に刊行された文献の内容分析から. 大阪大学看護学雑誌, 19(1), 9-15.
- 高橋未来, 葛谷玲子, 石川かおり. (2014). 精神科看護領域における家族看護研究の動向. 岐阜県立看護大学紀要, 14(1), 3-12.
- 田野中恭子. (2011). 統合失調症の家族研究の変遷. 立命館人間科学研究, 23, 75-89.
- 田野中恭子. (2019). 精神疾患の親をもつ子どもの困難. 日本公衆衛生看護学会誌, 8(1), 23-32.
- 田中綾子, 築瀬誠. (2009). 精神障害者の家族の健康状態に関連する要因—精神科作業療法の新たな役割の検討—. 作業療法, 28(5), 536-546.
- 徳田由希. (2019). 統合失調症の子どもを持つ父親の体験に関する文献検討. 東京女子医科大学看護学会誌, 14(1), 23-29.
- 上野千鶴子, 大熊由紀子, 大沢真理, 神野直彦, 副田義也, 樋口恵子, 森川美絵, 笹谷春美, 竹内孝仁, 井口高志, 高見国生, 袖井孝子, 玉井真理子, 春日キヌヨ, 宮崎和加子, 阿部真大. (2008). 家族のケア 家族へ

- のケア<4> 家族のケア:家族へのケア. 岩波書店.  
山川みやえ, 牧本清子. (2014). 研究手法別のチェックシートで学ぶーよくわかる看護研究論文のクリティーカー.日本看護協会出版会.
- 吉井初美, 光永憲香, 斉藤秀光. (2013). 我が国の初発統合失調症患者の母親に関する研究動向と支援課題.東北大学医学部保健学科紀要, 22(1), 1-6.
- 全国精神保健福祉会連合会. (2010). 精神障害者の自立した地域生活を推進し家族が安心して生活できるようにするための効果的な家族支援などの在り方に関する調査研究.

